

せ と る C. E. T. L.

教育・学習活動支援センター広報 No.2

くおーたりー Quarterly

発行日 3. May. 2001

挨

新しい学生を迎え、授業の進め方を工夫されておられる先生方も多いと存じます。私も毎年、新学期になりますと、緊張感と期待感に大学教師である喜びを感じます。むろん、計画どおりにはゆきませんが、やってみる価値のないことなどはほとんどないという楽天主義でゆこうと決めています。

さて、教育・学習活動支援センターでは本年も、先生方の授業をよりよいものにするためお役に立てる事業を計画しています。

まず、昨年度は本間マリ子先生、南紀子先生のご協力をいただいて実施した授業見学会を、さらに拡充いたします。すでに何人かの先生方から授業公開のお話をいただいておりますが、

拶

センター長 坂 本 辰 朗

さらにご希望の先生がおられましたらお申し出下さい。

また、昨年同様、授業改善のためのワークショップも計画しております。今年度は学内だけでなく、学外のワークショップへの教員の派遣（以下のアナウンスをご覧ください）も拡大してゆきます。

さらにセンターでは、先生方に内外の大学改革の資料を提供するというサービスも開始したいと存じます。すでにアメリカ合衆国の高等教育専門紙である *Chronicle of Higher Education* などの購読を開始いたしました。閲覧や複写をご希望の先生方の来訪をお待ちしております。

FD関連情報

当センターでは、FD関連セミナーへの本学教員の派遣を考えています。今夏の派遣対象セミナーは以下の通りです。ご関心がある方は、5月中に当センター担当の関田（内線：3434または2148）までお問い合わせ下さい。

- 大学教員懇談会「大学の世紀」（財団法人 大学セミナーハウス主催）
開催期日：2001年7月7～8日（1泊2日）
開催地：八王子・大学セミナーハウス
- 大学の教育・授業を考えるワークショップ（財団法人 私学研修福祉会主催）
開催期日：2001年7月30日～8月1日（2泊3日）
開催地：グランドホテル浜松
- 大学における協同学習指導法研修会（U of Minnesota, Cooperative Learning Center）
開催期日：7月23日～27日（6泊7日）
開催地：米国・ミネアポリス

私の授業改善法

「人間教育のための授業改善を目指して」



短大英語科
南 紀子

最も人間教育に適した教育の場はゼミではないかと思う。小人数であるが、性格や個性はそれぞれ異なり、一人ひとりが役割や責任を果たし、全員がまとまって何かをやり遂げ、伝統を築いていくというのは容易ではない。

1993年度以来、私のゼミではインターネットを利用した英語教育を行っている。当ゼミの特徴は毎年公開プレゼンテーションを行うことである。例えば、白鳥祭、年度始めや終わり、オープン・キャンパスや卒業式前の春休みを利用しさまざまな形態で、ゼミ生と一丸となって企画し挑戦してきた。2000年度は白鳥祭期間中3日間に、各自の研究テーマに基づいた質疑応答を含む30分の個人プレゼンテーションを16人全員が行った。

いかなる授業改善を行うべきか。牧口先生は「方法上の改良案は教育目的観の確立を先決問題とする」と。当ゼミの公開プレゼンテーションの教育目的は以下の4点である：

1. 各自の内面に“確たる自分”を持ち、会話の中で明快な表現力を養い、説得力のあるプレゼンテーション能力を養うため。

2. 情報を受信・交換するのみに終わらせず、女性の主体性と独創性を育てるため。
3. 女性の社会性を育み、学習成果を学習者間でシェアし、それらを整理し社会に還元するため。
4. プレゼンテーション技術を共に学び合い、実際に多種多様な人たちの前で発表し、質疑応答で対応できる知性と精神力を養成するため。

20世紀最後のゼミの時間（平成12年12月12日4限）に、教育・学習活動支援センターを通し、公開ゼミを行った。ご多忙の中わざわざ参観してくださった諸先生方のおかげで、貴重なご意見や感想を賜り、励まされ、何をどう改善すれば良いかを私自身も学生も共に学べた有難い機会となった。「百聞は一見にしかず」で今後の授業見学会は、有志の授業と共に、各学科が推薦する先生がたの授業を見学させていただければ、更に充実した内容になるのではないだろうか。

「私の授業」



教育学部
藤平田 英彦

私は教育学部出身である。「教師は、授業が勝負である。」と学生の時から先生方に言われていた。

私の授業の原点は、教育実習の時の授業であり、大学院生の時に4年間担当した東京都立高

校の非常勤での授業である。

私の板書事項を生徒達がノートしているのを見て、恐ろしくもあり、いい加減なことは出来ないなと思ったものである。自分の得意分野の時は教室に弾んで行き、不得意分野の時は足が重かったものである。特に、教材研究が不十分であった時は、冷汗の50分であった。

現在、私は教職指導室長として、学部生と通教生の教育実習事前講義を担当している。その中で、授業に臨む際の留意点として次の事を話している。(1) 声の大きさが大事である。(2) 顔の表情が大事である。(3) 板書の字の大きさと丁寧なことが大事である。(4) 全体を見て話す事。(5) 机間巡視をすること。

大学での授業でも極力守っているつもりである。

教育実習の際、最も苦勞するのは学習指導案を仕上げる事である。学習指導案は45、50分間の授業のシナリオである。導入、展開、まとめの順で授業が進行していく。

大学の授業には、授業のシナリオは無いが、そのことを念頭において授業をしているつもりである。

学生の知力の低下が巷間で言われている。知識の量が大事であると言っている先生もいる。人の考え方は、知識と経験の組合せであると常々思っている。知識の教授にこだわっていくつもりである。私は特別に変わった授業をしているつもりはないが、出席をとる一環として毎回何人かに質問をし、コミュニケーションを図っている。言葉だけでなく、授業の場に可能な限り機器を持っていきデモンストレーションをしたり、実験室で見せたりして、授業に変化をもたせている。

「教授が変われば大学は変わる」 岩田年浩
(関西大学教授) 毎日新聞社の本は成程と思わせられる。

「情報技術と人間教育」



工学部
相 曾 益 雄

大学生の自覚というか問題意識をもたせることが授業の運営で一番大切だと思う。そのためには、学生を理解することと、世の中を理解することが必要だと思うので、いろいろ工夫をして学生や企業の人の話を聴く。

学生に教室で話をさせるのは難しい。質問をしても短い答えが返ってくるか、こないかで、話下手の私は対話が続かない。そこで、授業中の演習問題を隣同士でピア・レビューをさせるとか、レポートをグループ・プロジェクトとして提出後プレゼンテーションをしてもらう。結果的には、毎回、グループ作業は大変好評である。グループ間の競争で学習が活性化し自律化し、先生との会話も多くなり、Eメールでの質問が頻繁になる。

もう一つの私の関心は、ビジネスの変化を反映させることで、企業の友人達の話の聞いたり、展示会などによく行く。情報技術は変化の推進役で、学生には少しでも似た環境で創造的発想力を伸ばしてやりたいと思う。セメスターを通して全部の課題や宿題、それらのやり方を中心

に授業の予定等を第1回目にプリントして配るが、Webサイト（ホームページ）にも上げ、適時更新する。コンピュータを使ってプレゼンテーションしたときはそのままWebサイトに上げる。インターネット上の参考資料の紹介には、Webは最適だ。

情報技術のインパクトは絶大だが、教育に真に有効かは教授設計法の開発に依存する。決定的な問題は授業の核心が何かで、それは先生と学生の人間関係だと思う。

「掘れば足下に泉わく」



文学部
小林 修

授業改善法と言っても特別に意識しているわけではないので、十年一日の如く踏襲してきた従来からのやり方について書いてみます。

十年程前に人文学科が創設され、その1期生から行ってきた方法についてであります。最初是一般教養科目の倫理学に始まり、ついで人文

学科での概論、現在はそれに入門と教職課程の倫理学概論とが加えられました。半期と通年ものとのちがいはあっても、授業方法には変わりありません。受講生が年々かわるだけです。受講生数は年間千名を超えた年もありました。全学部全学科全学年から選択してきます。

授業の内容は大きくわけて、毎回三本立てとなっており、まず第一が先週書いた作文のうち代表例を読んでやります。さしつかえがあると思われるもの以外は、原則として氏名も番号も発表します。一回で読めるのはせいぜい十数名です。学生達はじっと聴いています。私の感想や批評も加えながら読み上げます。つぎに話すのは、今回のテーマについてです。その際参考例として過去に先輩達が残していった文章をいくつか紹介します。残りの10分から20分の間で、配られた白紙に各自書いて終わります。その繰り返しです。年間20枚書きます。学生は「この授業に参加していると…」とよく口にします。この方法でうまく行くと、接触・触発・覚醒・感化のプロセスを踏んでいる様に思えます。坂本センター長の言われた「掘れば足下に泉わく」とはこのことかと実感します。

編集後記

本号で掲載しました各種セミナーや授業見学会への積極的な御参加をお待ちしております。(N)

C. E. T. L. Quarterly No. 2

編集・発行

創価大学 教育・学習活動支援センター

〒192-8577 八王子市丹木町1-236

Tel : 0426 (91) 9782 内線 2148

E-mail : cetl@soka.ac.jp